

コミュニティ

community
The New Apostolic Church around the world



2021(令和3)年第10号



(教理)

西太平洋教区ニュース……………2

(nac.today)

神のイニシアティヴを代表する使節…3

だれがどの席に着くのか……………4

短距離ではなく、長距離の走り方で…5

疲れたなら、私のもとに来なさい……6

破壊をもたらすもう一つの「宗教」……7



日本新使徒教会

シュルティ教区使徒の書齋より



兄弟姉妹の皆さん

新型コロナウイルスのことが話題にされるようになって久しいものの、まだまだ話題とされなくなる気配はありません。西太平洋教区の多くの人々がいわゆる「ロックダウン」の状況で生活しており、すべての人々が何らかの形で制約を受けています。このような状況は、社会における私たちのライフスタイルを乱すだけでなく、神様への礼拝(らいはい)の在り方をも乱すものです。

こうしたこと、つまり、信徒として集まれないこと、聖餐にあずかれないこと、これまで信徒として体験してきた交わりの喜びを見合わせなければならないこと、使徒が訪問できないことなどを考えてみると、これは私たちの信仰生活のごく一部を破壊しているに過ぎません。

私たちにとっての信仰生活は、その大部分がイエス・キリストへの信仰を個人として確信することと、その信仰が私たちの生活に実際に効果をもたらすことです。交わりの制約がこれに影響を与えることはありません。7月の礼拝では、福音にかなった生活を送ろうという勧めをいただきました。これは、私たちにとって非常に示唆に富むものです。

思いやりが永遠の命へ

救いを得るためには、神様と隣人を愛する生活をしながら、救いという神様による働きを信じ、自分の意志でそれを受け入れることが必要です。そのためには、キリストへの信仰を実践すると同時に、隣人を思いやる必要があります。これを実践しようとする私たちの願いは、私たちが救いを重要視していることの証しです。

責任ある行動

私たちは、自然環境という賜物と、救いという賜物を大切にすることが求められています。こうした感謝の気持ちから、私たちはこれらの賜物を思いやりのある賢明な方法で扱うことに努めます。人間は神様のかたちに造られました。このことは、言葉、理性、道徳的判断、生産や創造といった神様としての特性に認めら

れます。人間はただ必要なものを取る込むことで存在するだけでなく、これらの聖なる特性を生かして働き、未来を含めたすべての人の利益に貢献すべきです。

神を愛し、隣人を愛する

こうした生き方は、神様と隣人を愛そうという一人ひとりの願望が原動力となります。兄弟愛は、寛容の気持ち、分かち合う気持ち、赦す気持ち、支える気持ち、感謝の気持ちとして表現されます。

マタイによる福音書24章12節で、イエス様は「終わりの日には、悪や不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える」と予言しておられます。不公平、暴力、憎しみに満ちた世界で人を愛することは困難です。福音は「キリストによって義とされるためには、人類はイエス・キリストを信じなければならない」と教えています。キリストを拒否することは悪を行うこととなります。従って、マタイによる福音書24章12節の言葉は、次のように解釈することができます。「愛が減るのは、キリストへの信仰が減るからだ!」イエス・キリストへの信仰によって育まれる愛は、何よりも強いものです。

私たち一緒に集まって、何事にも邪魔されず、聖餐に与れる日を心待ちにします。しかし、それまでの間私たちは、もっとキリストに似た者になりたいという願望に集中しなければなりません。

敬具

ピーター・シュルティ

(署名)

sacrament (34) :

神のイニシアティブ* を代表する使節

これまで聖餐について、何を、どのように、どこで、いつ執り行うかについて議論してきましたが、今回は、誰が執り行うかについて議論したいと思います。これに対する答えは、キリスト教諸派どこも実質的によく似ています。ただしその答えの理由は教派によって様々なのです。



新使徒教会の場合ははっきりしています。つまり、神様の御名において物事を語ったり行動を起こしたりする権限は、叙任された教役者だけに与えられます。この権限が与えられるのは、使徒に加えて、司祭職だけです。教会は聖餐においてその使徒性を行使します。この権限をイエス様はこの使徒職にお与えになりました。そしてこの使徒職は、新使徒教会において人的に再興しました。

カトリック教会、正教会、聖公会はそれぞれに非常に類似した考え方で、叙任された司祭と司教〔主教〕が聖体拝領〔聖体機密、聖奠〕の執行を認められています。彼らも皆めいめい使徒性を行使しますが、その使徒性は使徒継承という異なる方法によるものです。つまり聖職者の権限は「按手を通して行われる司教〔主教〕の叙任は、はるか聖書に書かれている使徒の時代から連綿と続いてきた」という考え方によるものである、ということです。

理論と実情との乖離

プロテスタントでは、受洗したキリスト教徒であれば誰でも——少なくとも神学的理論上——聖餐を執り行うことができます。これは、万人祭司の教えに則っています。しかし実際の状況は違うのが一般的です。教会法によれば、聖餐を執り行う目的で叙任された人間のみ——つまり男女の別なく牧師——が神の言葉を公に宣べ伝えたり、主の晩餐を執り行ったりすることを許可されます。

段階による例外を認めている教派もあります。つまり訓練を

受けている聖職者であれば、教師による監督の下で執り行うことを認める場合もあります。場所によっては、特別に訓練を受けている信徒伝道者も認められます。

聖別と施与との区分

新使徒教会では、聖餐の要素を聖別するのも施与するのも、叙任を受けた教役者が行います。しかしほとんどの教派は、聖別と施与とを区別して行います。言い換えれば制定と交わりとを区別する、ということです。

例えばカトリック教会の場合、〔新使徒教会で言うところの〕施与は、助祭を含む叙任を受けた聖職者が行います。平信徒も施与を行うことができます。侍者として進行を補佐したり、臨時聖体奉仕者として期間や場所を限定して行ったりします。

プロテスタントの一部でも、非聖職者による施与が認められています。ほとんどの場合、教会役員がその任に就きます。改革派教会では信徒同士が要素を施与し合います。

教派と公同性との区別

実際に、主の晩餐の執行が、それに召された者の手に委ねられるのは、それなりの理由があります。1982年のリマ文書はエキュメニカルな共通認識を次のように文書化しています。「この、聖餐における導きと主催者がほかならぬ主でいましたもうという事柄を、ほとんどの教会は、聖餐の司式を、教会的に正当に位置づけを認められ（任職され）た教会の奉仕職に限って委ねるという仕方で、表現している。聖餐を主の御名によって執り行う人物の身分が、この儀式がそこに集まっている集団の恣意的な作りごとでもなく、また彼ら自身の所有に属することでもなくて、主の教会のうちに生きていますキリストご自身がお与えになる賜物として受け入れられるべきであるということを示すのである。こうして聖餐の司式者は、そこで働いておられる神のイニシアティブを代表し、教会の公同性に与っている他の教会と、この聖餐を通じて互いに関わりを保っているものであることを証しする使節の役

割を果たすのである。」

しかしこれでは、「誰が聖餐を執り行うのか」という問いに、半分しか答えられていません。聖餐を施与する人物のほかに、

聖餐に与る人物にも同様に重要な役割があるのです。つまり「聖餐に与れるのは誰か」ということです。まさにこれこそ教派間を隔てる壁なのです。 (5月20日 nac.today より)

* イニシアティヴ…率先して行動し、物事ある方向へ導く力。主導権。[広辞苑 第七版]

sacrament (35) :

だれがどの席に着くのか

主の食卓に着く --- このためには数多くのハードルがあります。どの教派も聖餐に参加するのに条件を付けています。他教派で聖餐を受けようとする、このハードルに引っかかってしまうのです。



一つ目のハードルは洗礼との関係です。しかるべき手続きで受洗した人だけが、主の晩餐*に参加することができます。一部の福音派の場合、青年とみなされない者は参加できません。分別のある成人として受洗した者でなければいけません。ごくわずかの教派——メソジスト教会など——は、受洗者でなくても主の晩餐を受けることができます。しかしここでも、イエス・キリストを信じるのが参加の条件です。

二つ目のハードルは年齢です。古代、幼児は洗礼後の数分間に当たり前のように聖餐を受けていました。正教会と東方カトリック教会は、今もこの伝統を受け継いでいます。

12世紀になると、ローマカトリック教会では、分別のつく年齢に達した後に、許可されるようになります。この年齢制限は当初、7歳くらいでしたが、その後しばらくすると、10歳から14歳の幅に引き上げられていきました。その後再び7歳に戻されました。はじめて受ける主の晩餐は初聖体として厳粛に行われます。

宗教改革期の教会では、主の晩餐に参加するのは、12歳から16歳に行われる堅信礼まで待たなければなりませんでしたが、そのうち、子どもの参加がほぼ認められるようになりま

した。改革派教会では、何十年も前から子供の参加が一般的となっています。新使徒教会では、洗礼を受けた子供も受けることができます。

三つ目のハードルは所属している教派です。しかもかなり複雑です。というのは、施与する聖職者の規則と聖餐を受ける側の規則という、二つの異なる教会の規則が同時に適用されるからです。

最も厳しいのは正教会です。彼らは教会を、聖体礼儀を行う者の集まりと定めているからです。自分たちの祭儀に参加する人は、その過程で自分たちの教会に属することにもなるのです。例外はカトリック教会の信徒で、他に選択肢がなく、カトリック信徒から要望がある場合に、受けることができます。ただし、正教会やカトリック以外のキリスト教徒は、アンティドル*に参加することができます。

カトリック教会も、正教会に対して同様の例外的扱いがあります。それ以外の教派の信徒については、生命の危険やその他の重大事案の場合のみ受けることができますが、それも、自分が通う教派の教会に行くことができず、以前からカトリックの教職と秘跡*の有効性について信仰を告白している場合に限られます。カトリック教徒は、他教派による主の晩餐に参加することを禁じられています。

ルター派でも非常に保守的なところは厳しいです。一方、ほとんどのプロテスタント諸派は、教派同士が相互に参加できる資格を維持しています。主の晩餐に参加できるキリスト教徒なら、参加が認められます。他教派の主の晩餐に参加することは推奨しませんが、これらの教派は、信徒にそれを禁じるだけの正当性はない、と考えています。

新使徒教会の場合、三位一体の御名において水の洗礼を受けたすべてのキリスト教徒は、ゲストとして聖餐に参加することができます（教理要綱 8.2.21）。新使徒教会員も他教派の主の晩餐に参加することはできますが、長期にわたり他教派で受けるということは基本的にその教派の教理を告白しているのに等しい、ということをお勧めします（教理要綱 8.2.22）。

四つ目のハードルは、個人に与えられる条件です。例えば正教会は、この祭儀に与る日の午前0時からの飲食禁制と、事前の告白を必要とします。これと似たものは、ローマカトリック教会にもあります。小斎といって、聖体拝領に参加する人は、少なくとも一時間は飲食を行わないこと（水を除く）が要求されます。重い罪を犯した状態で生活している自覚がある人は、聖体拝領の機会が与えられません。カトリックでは、

例えば離婚後（別の伴侶と）再婚した人も、聖体拝領の機会が与えられません。

新使徒教会も、かつては聖餐に与る機会に関する問題に悩まされていました。例えば婚姻届を提出せずにパートナーとして同居している信者や、同性愛の信者は、聖餐に与ることができませんでした。しかし1986年、ハンス・ウルヴィラー主使徒によって、この制限は撤廃されました。それ以来、新使徒教会では「個人の責任」という原則が適用されています。

<編者注>

* 主の晩餐…聖体祭儀、聖体礼儀、聖餐式、聖奠など、呼称は教派によって様々です。

* アンティドル…正教会やカトリック教会において、切り分けられた聖餐のパンが聖別されずに、聖体機密で使われることなく残ったパンのこと。

* 秘跡…新使徒教会の sacrament に近い。

（6月1日 nac.today より）

短距離ではなく、長距離の走り方で

『一般的な未来』ではなく、『キリストにある未来』のことです」と、チチ・チセケディ教区使徒（コンゴ民主共和国南東部）は言っています。この二つは大きく違います。私たちが知っている、神様による救いのご計画の始まりと終わりについてのお話です。



「キリスト、我らの未来」という年次標語は、私たちの教区に属す青年たちにとって、時宜を得たものであると言えます。彼らの多くが暮らす環境においては、将来に対して多くの不安があります。それに加えて、新型コロナウイルスのパンデミックに関連した現在の健康状態と、それが引き起こすあらゆる副次的な被害を考えると、未来を見通すことがほとんど不可能になっています。

これは、「もう人生に何の意味もない」と判断するところまで追いつめられているということを示唆しているのでしょうか。

この「未来」という言葉を理解するためには、少し時間が必要かもしれません。例えば、広辞苑第七版によれば、「過去・

現在とともに時の流れを三区分した一つで、まだ来ていない部分であり、『将来』より広く、一般的な称」と定義されています。確かに、尺度がなく、時間の領域では無限であるように思えます。確かにその通りですが、未来をこのように見ても、恐怖に陥るだけです。

神の子たちの未来の見方は、これと違います。主使徒はそのことを明確に述べています。「キリストという観点で私たちの未来を見よう」と提案しています。そうすることによって、未来が不確定ではなくなり、未来を俯瞰することができます。ここでいう未来とは、救いのご計画を指しています。確かに、具体的な日時まで特定されているわけではありませんが、どのような出来事がどういう順番で起きるかということは決まっており、その始まり方も終わり方も分かっているのです。

私たちが言っているのは、この世での義務を果たそうとせず、イエス・キリストに帰依する人のことではありません。この世で生きていく努力は続けます。一方私たちの存在は、必ずしも物質的な面での成功に結びついているわけではないことを自覚します。物質的な面で成功することが悪いわけではありませんが、キリスト者として、主とその来臨に目を向け、

この未来に目を向ける時間を持ちましょう。

私たちは次のことに気づかされます。

- キリストが見える力を与えてくださる。聖霊の光に照らしていただくと、こんにちの状況を様々に読み取ることができます。
- キリストが私たちの存在意義を与えてくださる。神様による贖いのご計画によって作成されたご計画に従って行

われる神様の働きを知ることができます（教理要綱 4）。

主使徒は、イエス様の再臨に向けて積極的に準備しよう、と勧めています。準備の方法としては、できれば、短距離の走り方ではなく、長距離の走り方を選びましょう。日付が変わってからでないと、準備できないわけではなく、もう今から準備できるのです。

(5月24日 nac.today より)

疲れたなら、私のもとに来なさい

疲れた人、重荷を背負った人へ向けたイエス様の呼びかけです。ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒は、疲れた人や重荷を負った人に力を与えるだけでなく、このような人々にイエス様が何を語っておられるかを明らかにしています。



「すべて重荷を負って苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタ 11：28）。主使徒はこの言葉を基調聖句として引用し、2021年8月8日にドイツのライプツィヒで行われた礼拝を司式しました。この礼拝は、北東ドイツ新使徒教会に属す全教会にオンラインで配信されました。

重荷

この御言葉は、運命の一撃に圧倒され委縮している人、自分が他人と異質であるがゆえに疎外感を抱いている人、自分が常に不利な立場にいると感じているために不満を感じている人のためのものです。このような人々すべてにイエス様は「私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」と呼びかけておられます。

しかし、この言葉は何よりもキリスト者に向けた呼びかけです。イエス様はこんにちの私たちに対して、「すべて重荷を負って苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」と呼びかけてくださるのです。

仕えることに疲れる

主に仕える教役者だけでなく、教会で職務を行うすべての兄弟姉妹も、奉仕することに疲れてしまいます。ある時点で疲れてしまうのは、至極当然のことです。この様子をご覧になったイエス様は、声もかけずに奉仕を続けさせるようなことをなさいません。「あなたには休息が必要だ」と、何度も声がけしてくださいます。「私のもとに来なさい。礼拝に来なさい。私のところに祈りに来なさい」と声をかけてくださいます。祈りを通して、礼拝を通して、聖餐を通して、信徒はイエス様のために働き続ける力を得ることができます。

闘いに疲れる

主使徒はこう述べました。「皆さんはどうかわかりませんが、私はずっと気になっていることがあります。というのは、私は一生懸命努力して、もっとうまくやろうと頑張ったのに、うまくいかないのです。そうすると嫌になってしまい、成功しない努力に疲れてしまうことがあります。ここでも、イエス様は次のように言っておられるのです。『私のもとに来て、私から学びなさい。あなたに恵みを与えよう。私はすべてを回復させてあげよう。あなたの罪を赦してあげよう。私はあ

あなたに期待するのは、欠点のないことではなく、私を愛してくれることだけである。あとは私に任せなさい。休ませてあげよう。』

待つことに疲れる

イエス様は、ご自身を待つことに希望を与えておられます。「主がもうすぐ来られる」と聞かされてからかなりの時間が経っており、時々兄弟姉妹が疲れていることに気づきます。しかしこれについても、「復活された主が応じておられます」と主使徒は説明しています。「主は次のように言っておられます。『もっと私に親しみ、私の似姿にまで成長しなさい。そうすれば、私がすでにあなたと一緒にいるのを、体感することができる。私はここにいる。あなたは私の存在を悟り、最後まで頑張れるであろう』」。

説教に疲れる

シュナイダー主使徒はこう言いました。「『説教がつまらない』と思っている人がいらっしやるようです。確かにそうですね。同じことの繰り返しばかりですから。何年も前から全く同じ

ことを聞いています。しかしだからといって、退屈と思う必要はありません。なぜなら、目標は、私たちが成長しイエス様に似た者となることだからです。これが本当の目標であり、成長がなければならず、新しい被造物が私たちの内で成長しなければならぬのです。」

交わりに疲れる

主使徒は次のように言っております。「交わりを少し面倒に感じてしまうことがあります。『もうあの人と会いたくない。もう彼女の話は聞きたくない』といった声が聞かれます。確かに、私たちは十人十色ですし、完璧な人は誰一人いません。」しかし主使徒は、説教が終わる少し前に、それでもこの交わりにとどまることに価値がある理由を次のようにまとめました。「皆さんが会衆として集まっているのは、イエス様が皆さんに救いを与えたいと思っておられるからであり、共にご自身に仕えるよう皆さんを召し出されたからです。そう思えば、交わりを深めることが面倒ではなくなります。」

(8月26日 nac.today より)

破壊をもたらすもう一つの「宗教」

豊かな収穫、豊かな生活をしていても、死後の世界に入る時は手ぶらである——「愚かな金持ち」のたとえ話はもう古いのではないか。そんなことはありません。このたとえ話と、神経神学とニューロマーケティング*との関係を見ていきましょう。



みんなが幸せになるお買い物」というスローガンを掲げた衣料品店の広告パンフレットが、我が家に舞い込んで来たしましょう。

このようなスローガンは、一つの時代を象徴しています。「資本主義」という名を冠するものが世界最大の宗教になった時代です。悔しい思いをした時は買い物で自分を慰め、楽しい

思いをした時は買い物で自分にご褒美を与え、借金から罪悪感が生まれ、収入が救いとなるような世界です。また、福音宣教よりも利益を重視するキリスト教系ベンチャーも存在します。

こんなにちに見られる偶像崇拜

これらの考え方は、非現実的な宗教的狂信者が提起する論争ではなく、賢明な批判的哲学者の長年の洞察です。「資本主義は宗教である」と、世俗化したユダヤ人のヴァルター・ベンヤミン*が1921年に述べています。「資本主義は本質的に、同じ悩み、苦しみ、不安を満足させるためのものである」ということです。

その50～60年後、宗教に批判的であった社会心理学者のエー

リッヒ・フロム*は、さらに次のように言っています。「現代の偶像崇拜の集団的かつ強力な形態として、市場の力と成功と権威の崇拜が見られる。」

科学的に検証可能

これらの知見は、イデオロギー的な立場を超えたものでもあります。それらは今、科学的に検証された事実です。神経科学とニューロマーケティングは、それぞれ「神を語ること」と「商売を語ること」とが「脳研究」と交差するところにある科学の名称です。

1980年代及び2000年代から、それぞれの分野の研究者たちは、神経学という古典的な手法を用いて、信者や消費者の心の中で何が起きているのかを調査してきました。「私にとって全く驚きだったのは、宗教と強力なブランドとが似たものだということです」と、デンマークの作家でありマーケティングの第一人者であるマーティン・リンストロームは、両分野から集めた結果を要約しています。

イエス様が昔からご存じだったこと

このことは、ルカによる福音書12章に書かれているイエス・キリストの二千年前のたとえ話がいかに時事的であることを示しています。だからこそ、じっくり考察したいのです。愚かな金持ちの穀物農家の彼が何か悪いことをしたのでしょうか。問題は成功したとか株を持っていたとかではなく、心の平和を富に結びつけていたことなのです。「魂よ、…さあ安心して、食べて飲んで楽しみ。」

ギリシア語で「魂」をプシュケー *Ψυχή* と言い、「休む」をアナパウオー *ἀναπαύω* と言います。一つは、その人の内面や人格や個性を意味し、もう一つは、イエス様があのたとえ話をされた時とは別の時に、疲れた人や重荷を負った人に約束なさった平和を意味します。「あらゆる貪欲に気をつけ、用心しなさい」とキリストは穀物農家のたとえ話の中で警告されましたが、これは持っているものを維持しようとする貪欲さ（「フィラルギア *φίλαργα*」）のことでなく、もっとも

積み上げようとする中毒性（「プレオナキシア *πλεονεξία*」）のことです。

この世界は始まりに過ぎない

さて私たちは、利益を最大化しすべてを消費する、非常に強力な資本主義の中にいます。様々な分野の科学者の集まりである「ローマクラブ*」が1970年代にすでに呼びかけていた「成長の限界*」を超えて、天然資源や人的資源の破壊的な^{さくしゅ}搾取の原因であることが長い間証明されてきた、いわば成長狂の中にいるのです。これがマーケットリーダー*のやることなのです。これで、競合他社は何を提供しようというのでしょうか。

科学者も遅くとも1970年代から研究しています。それによると、信仰を持つ人は持たない人に比べ、概して健康的な生活を送り、社会環境においてより多くのサポートを受け、より健康的な家庭で、より個別に対応したヘルスケアを享受しています。また、英国政府によるメタアナリシス*では、宗教が害とされないケースは少なくとも13%で、精神的な健康にプラスの効果をもたらすケースは84%という結論が出ています。

しかし、このような洞察は、現在のこの世においてでしか当てはまりません。これからの時代に存在していくものについては、まだ一言も語られていません。しかし、それを科学的に把握するのはなかなか困難です。信仰だけが助けになります。

(8月18日 nac.today より)

<編者注>

*ニューロマーケティング…神経心理学を市場調査に適用し、市場からの刺激に対する消費者の感覚運動、認知、および感情的反応を研究する分野。(Wikipedia)

*ヴァルター・ベンヤミン…(1892-1940)ドイツの文芸批評家、哲学者、思想家、翻訳家、社会批評家。(Wikipedia)

*エーリッヒ・フロム…(1900-1980)ドイツの社会心理学、精神分析、哲学の研究者。(Wikipedia)

*ローマクラブ…スイスのヴァンターツールに本部を置く民間のシンクタンク。(Wikipedia)

*成長の限界…ローマクラブが資源と地球の有限性に着目し、マサチューセッツ工科大学のデニス・メドゥズを主査とする国際チームに委託して、システムダイナミクス的手法を使用してとりまとめた研究。(Wikipedia)

*マーケットリーダー…最大のマーケット・シェアをもっており、一般に、価格改訂、新製品導入、流通チャネルの系列化などで業界の先鞭をつける企業。(流通用語辞典)

*メタアナリシス…複数の研究の結果を統合し、より高い見地から分析すること、またはそのための手法や統計解析のこと。(Wikipedia)

コミュニティ

2021(令和3)年第10号・日本新使徒教会発行

日本小教区主任牧司：門平 彰弘 (E-mail: kadohira.nac@icloud.com)

多摩教会 〒206-0014 東京都多摩市乞田1320 Tel. 042-374-0070 (日本小教区本部)

松山教会 〒799-2468 愛媛県松山市小川甲110番地17 Tel. & Fax. 089-994-3556

新使徒教会国際本部: <https://nak.org/>

新使徒教会西太平洋教区: <https://nacwesternpacific.org/>

新使徒教会日本小教区: <http://nac-japan.org/>

監修: 高島 健郎 / 編集: 松岡 利恭